

THE LAST SEVEN DAYS

Edited by

Kiyotaka TANIKAWA

(National Astronomical Observatory of Japan)
tanikawa.ky@nao.ac.jp

April 2004: First partially English edition

Preface

Chaos lives in between perfect order and perfect disorder. Our world represents itself as a typical example of chaos because the world is not in perfect order nor in perfect disorder. Indeed, perfect order or perfect disorder is an idealized notion which will never be attained. The world as it is exists because it is in chaos. Galaxies, stars, Earth, life, and human beings can exist only because the world is in chaos. The world is meaningful for us only because it is in chaos.

Then, is there any particular meaning in talking about 'chaos', if the state of the world is invariably chaos? Is it a simple substitution of the word? Is it not a tautology? Why do scientists shout, 'Chaos', 'complex systems', 'emergence', and so on?. People from thousands of years ago tacitly knew that the world is in chaos. When people looked at brown leaves falling beautifully and stochastically in autumn, and looked at clouds floating and changing form in the sky, they felt chaos of the world in their mind. One feels chaos in life when one looks back to one's youth and regrets having chosen an erroneous alternative in the critical moment of one's life. 'If I chose the other one ...'

However something changed in our scientific world. What changed? Scientists realized that chaos is the ordinary state of the world, and hence this ordinary state must be treated and explained. This realization came only several decades ago to few scientists of various fields and then has been spread in a decade or two like an infection.

The world is in chaos. Then what can we ask next? The only question we may ask is to which extent the world is in chaos? How far the world is from perfect order? Or how far the world is from perfect disorder? For the moment we have no answer.

Let me give examples disregarding mathematical or physical rigor. One may intuitively understand that life is not compatible with perfect order or disorder.

All the people in the world are standing still forever. This is one of the simplest examples of the world dictated by order. One may at once understand this quiet world is never maintained long. Every worker or student goes to office or school at the same time in the morning and returns home at the same time in the evening. Office or school is fixed to each person. This is a periodic world. The world seems to be full of dolls driven by springs and marching punctually.

One more variant of the world in perfect order is that people go out for work not at the same time and come back home not at the same time, but the time shifts everyday slowly back and forth. No growth, no promotion, no retirement. The world is quasi-periodic.

It is very difficult to imagine the other extreme: perfect disorder. A society in perfect disorder is a contradicting notion. The society implies some degree of order.

Let us dare to imagine what happens if the world disintegrates into perfect order or perfect disorder in a week. What kind of events take place successively in seven days. In short, let us destroy the world in seven days and describe the processes. You will see in the next page a small example.

Kiyotaka TANIKAWA

Example

月曜日、わたしはいつもどおり妻に玄関まで送られて、高校生の息子と一緒に家を出、勤め先に向かった。新宿駅で乗り換えたが、今日は人の数がやや少ない。息子はいつもは「行って来ます」というのだが、ぶすっとしたままにも言わずに別のプラットホームに行く。勤め先は研究会などで人が出はらっているようだ。何人か新しいスタッフが就職して来たらしい。見知らぬ研究者が構内を歩いている。

火曜日の朝、いつものトースト、ハム、サラダ、ミルクの朝食ではなく、ご飯と味噌汁であったが、これも悪くない。つとめに出る。息子は関係ないといった感じで少し離れて立つ。新宿駅の人々の数は昨日より減っている。何か妙だ。勤め先に着くと、外国人客員の定員が増えたはずはないのに、初めて見る外国人の研究者が何人かいる。今日の研究室セミナーは古代史の話であったが、それなりに興味深かった。

水曜日、朝一緒に出た息子が新宿で降りない。理由を聞く間もなく、わたしは人波に押されて電車を降りる。勤め先までのバスは、いつもとは違うルートを通る。工事で通行止の場所でもあるのだろう。研究室に入ると、いつも珈琲を飲みに来る同僚のK氏がわたしの席に座っていた。「やあ」と言ってそのまま仕事を続ける。わたしは仕方なく別のコンピューターの前に座って仕事をした。家では久しぶりに料理を作った。妻はどこかに出かけているようだ。

木曜日、息子は止める間もなく、駅で反対方向の電車に乗っていった。勤め先では庶務課の部屋で一日中過ごした。仕事の勝手がわからず、いつも通勤途中で読んでいる本を広げて読んでいた。勤め先から家に帰ってみると、息子はおらず、見知らぬ娘が夕食を食べている。今日の料理はボルシチである。妻は平然とふたりにおかわりをくれる。妻の髪の毛が金髪であることに気づく。

金曜日、朝、わたしは東北新幹線に乗って水沢江刺に向かった。自分の勤め先が水沢の観測センターであると思えてきたのだ。列車はスピードを速くしたり遅くしたり乗り心地が悪かった。倍も時間がかかった。駅前からタクシーに乗って、「天文台、お願いします」というと、運転手は道順を聞く。観測センターの建物の3階の研究室に入り、仕事を始める。もっとも、机の前に座っても何をしていいか判らない。7、8年前に退官したはずの先輩がこちらを見てニコニコ笑っている。彼女は生け花をしているところだ。

土曜日、観測センターで昔住んでいた官舎で眼を覚ます。昨晚、街に出て酒を飲んだことを思い出す。誰と飲んだか覚えていない。勝手に酒を取って飲ん

だような気もする。朝食の席で前に座っている女性が妻なのであろうと納得する。実は、顔は丸く、凹凸が少ない。もしかすると男なのかもしれない。天文台の外に出ると、自動車が何台も路上に乗り捨てられている。水沢公園に行ってみる。軟式テニスコートでは何人かの人がコートのなかでボールもなしにラケットを振り回している。

日曜日、朝、冷蔵庫を開け、パンと牛乳を見つけて朝食を軽く済ませます。牛乳はなまぬるい。水沢の市内まで歩く。商店は昨日から開けばなしのようだ。誰もいない。外はうろうろと動き回っている人ばかりである。わたしも、何のためにここにいるのか、自分が誰なのか判らなくなってきた。人の顔がもはや区別できない。ガラスに映る自分の顔はますますまろくなり、意識も薄れつつある。

(谷川清隆、国立天文台ニュース [1999年7月1日号] より)

Contents

まえがき	i
例題 (谷川清隆)	iii
森田 悦久	1
花岡 一央	3
鈴木 宏	8
浅井 大	10
矢幡 和浩	22
出口 裕也	24
守谷 和之	28
アモンラット リイマニー	30
光田 智史	31
高妻 篤史	33
尾崎 仁	35
新開 研児	37
廣田 洋一	39
中野 貴比呂	41
山口 浩由	46
川路 友博	48
太田 哲二	50
武田 真樹	53
財満 康太郎	55
森高 外征雄	59
野本 裕史	61
原 祐輔	64
中谷 祐介	66
高橋 祐喜	69

磯野 裕	71
浅田 洋平	73
(匿名希望者)	74
横田 華奈子	76
上原 進	78
田中 大士	80
鈴木 一正	82
小林 国弘	84
高崎 勝之助	86
吉越 丈倫	88
山田 佳樹	89
五十嵐 悠一	91
戸澤 英人	93
丸山 泰史	97
牧 博樹	99
山田 康嗣	122
谷川 清隆	124
西坂 和洋	126
池田 匡宏	127
宮本 泰弘	128
佐々木秀治	130
向野 美由紀	131
平野 哲也	133
堀田 伸一郎	134
長谷川 泰子	136
菅沼 浩子	138
岡田 捷	140

Winnberg, Dagmar	141
Winnberg, Dagmar	143

月曜日。

今日からまた、一週間が始まる。前日が休日だったこともあって、体が少しだるい。さて、がんばって、大学へ行ってきますか。

... 講義を受け、家に帰る。何の変哲もない、一日だった。

火曜日。

今日もまた、同じように講義を受け、家路につく。今日は用事があったので、少しだけ寄り道をした。すると駅前でなにやら演説らしきことをしている集団を見かけた。といっても、気にすることもなく、通り過ぎたのだが。

今日変わったことと言えば、せいぜいそのくらいだ。まったく、平和な世の中だ。

水曜日。

今日も用事があったので、寄り道をする。昨日と同じ駅で降りると、昨日と同じ場所で、演説している人々が、またいた。ふと興味がわいたので、耳を傾けてみると、なにやら、「世界の終末が近い」だの、「今こそ我々は、自分たちの神を守らねばならない」だのといったことを話している。もしかして、あやしい宗教かなにかか？こういう連中とは、関わらないに限る。早く用事を済ませて、家にかえろう、と思ったそのとき、そのあやしい内容にもかかわらず、かなりの人だかりができていることに気付いた。こんな話がウケるとは、まさに世紀末、だな。

木曜日。

今日は、珍しくも、「絶対に休講にならない」といわれていた講義が休みになった。

珍しいこともあるものだ。

帰り道、今度は昨日までとは違うところで、同じような話をしている連中をみた。そのとき彼等の背がふと見えたのだが、驚いたことに、彼等は自分たちの背に、翼をつけていた。そう、まるで、天使のような。天使の格好をした宗教の勧誘員なんて、聞いたことがない。まさか、自分たちが天使だ、なんて言うつもりなのだろうか？すごい人たちが現れたものだ。

金曜日。

今日が終われば明日からまた休日だ。そう思えば、やる気もでてくる。

普通に講義をおえ、帰ろうとしたそのとき、構内で、あの、背中に翼をはやした人たちの仲間と思われる人を見かけた。彼女（その人は女性だった）は一

生懸命勧誘をしているようだった。最近、この手の人が増えてきたなあ、とか思っていると、彼女がこちらによってくるのが見えたので、とりあえずその場を離れた。彼女には悪いが、勧誘はごめんだ。

土曜日。

休日、とはいっても、特にすることもないので、適当に街をうろついてみたのだが、すぐ家に帰りたくなってしまった。なぜなら、あの、背中に翼を生やした偽天使が、大量に街をうろついていたからだ。信じられない、なぜ、あんなことをするんだろう？みんな、どうしてしまったというんだろう？なにより、何故、彼等は、この僕を、あんな、哀れむような目で見るとするんだろう？

日曜日。

恐ろしくて街には出られない。自分以外、みなあの偽天使になっていたら、きっと正気を保ってはいられないだろう。部屋に閉じこもっているしかなかった。

その日、珍しくも訪問者がきた。始め無視しようかと思ったが、母だということがわかったので鍵をあけようとした。その瞬間、恐ろしい考えが、僕の手を止めた。もし、母まであの、偽天使になっていたら？僕はいったい、どうすれば？母が鍵をあけてと催促する。

扉の外に母の声を聞きながら、僕は、悩んだ。

そして、意を決し、扉をあけた。そこにいた母の姿は、いつもの、見慣れた姿だった。僕はとりあえず安心して、家の中へ母を招き入れた。そのとき、母へつづいて、リビングへ入ろうとしたそのとき、僕は、見てしまったのだ。母の背についた、ふたつの... ちいさな、翼を。

その瞬間、視界が暗転した。もう、何も見えなかった。

[12月24日(金)]

今日の授業が終われば冬期休業だ。僕は、栃木の実家に帰る仕度をして一限の授業へ出席した。しかし、教官が現れず自然休講。だいたい夜の9時ごろに実家に着けばいい、と思っていた僕は2限以降の空き時間を部室で過ごした。午後5時、部室を出て、駅に向かった。井の頭線、千代田線をへて、北千住から東武線に乗った。ここからはもう一本道だが、何しろ2時間くらいかかる。何もすることのない僕はしだいに眠気に支配されていき、いつの間にか眠りに落ちた。目が覚めた。まだ東武動物公園だ。あと半分くらいある。だが、もう眠くはない。暇をもてあました僕は車内の中吊りに何気なく目をやった。スクリーンや暴露ネタがひしめいていたが、その中で一つだけ奇妙な記事があった。

「米国防省に謎の怪文書！内容不明、意味不明の文面は一体何をあらわしているのか？」

アメリカには物好きな人がいるもんだ、と思いつつその続きをたどった。

「犯人像は 狂人説、愉快犯説、宇宙人メッセージ説」

宇宙人からのメッセージ!? ネタに困ってマスコミもよくいってくれたもんだ。半ばあきれた僕は中吊りから目を離し、久々に見る田舎の風景を楽しむことにした。

空にはきれいな星々が見えた。その中に、スーッと宙を切る星を発見した。流れ星だ。

流れ星を見るのは何年ぶりか、と思いを巡らせながら、電車にゆられ続けた。南宇都宮駅で電車を降り、徒歩10分くらいの自宅に向かった。あたりは前とあまり変わっていない。わが家も、特に変化はなかった。久しぶりに家族と顔をあわせた。

家族もあまり変わっていない。僕は疲れていたの、早めに床に就くことにした。

窓から空を見上げると、きれいな星空が見えた。その日は、星空を眺めながらいつのまにか眠ってしまった。

[12月25日(土)]

目が覚めると、まぶしい光がとびこんできた。昼まで寝ていたのだ。寝室からリビングへ行き、新聞をボーッと眺めつつ、朝昼一緒の食事をとった。新聞の2面の隅っこに小さい記事がのっていた。

昨夜、日本各地で流れ星が見られた、という事実が、いわゆる「聖夜」にからめてロマンチックに書かれていた。俺だけが特別流れ星を見られたわけじゃないのか、と思いながら食事を終えた。午後は、父や母に今までの大学生活について語って聞かせてあげた。勉強のこと、部活のこと、様々なことを語った。夕食は家族で外食。近くの回転寿司屋に行った。特別なことは何もなかったが、イクラが妙に多く回っていたような気がした。

夕食から帰って、僕同様に里帰してきた友人に電話をかけた。何人かと電話で話をして明日わが家にて麻雀をやる約束を取りつけた。その後、風呂に入り、しばらくテレビを見た後、寝ることにした。今日の新聞の、流れ星の記事が気になって、思わず窓の外を見てしまった。昨日よりも美しい星空がひろがっていた。星が妙にはっきりと見えたが驚いたことに、僕が星空を見ている間（一時間くらいだった）に二つも流れ星が見えたのだ。やはり俺は運が良かったのだ、と勝手に思い込み、明日の必勝を祈りつつ眠りに就いた。

[12月26日(日)]

朝九時に起床。僕の家で麻雀をやるときは、朝十時集合、午後五時解散と決まっているので、嫌でもこのくらいの時間には目が覚めるものだ。朝十時、メンバーがそろった。麻雀開始。

絶好調だったのは、連日の家族麻雀で猛烈なツキを見せていたという友人のK。早い巡目でイーピンをきってリーチをかける。

「流れ星一丁きってリーチ！」

下家の僕は、何をきるか迷ったが、スーピンをきることにした。

「じゃあ、流れ星四つでどうだ！」

通らなかった。見事な一発振り込み。手痛い失点だ。ちなみに、ピンズの玉を流れ星に見立てているのは、近頃やけに多く見える流れ星をマスコミがさわぎたて、今やテレビがその話題であふれ返っているためである。確かな情報なのかどうかはわからないが、アメリカ国防省が世界中の天文学者を招集して、緊急の会議を開催するなんて話しも出てきている。

麻雀の結果は、いきおいづいたKの独り勝ち。一番の功労者は僕だ。きるピンズがことごとく当たり牌になってしまった。つくづく流れ星に縁があるということか。午後五時、友人たちは各々の家に帰っていった。

夕食までの時間、僕は自然とテレビの前にいた。主なニュースはやはり流れ星関連のニュースだ。昨晚も、24日の夜と同じく、各地で流れ星が見られたそう。しかも、流れ星の数はどうやら増えているらしい。何だか、ゾッとしてしまった。ちなみに、例の会議は実際に開催されるようである。

家族と夕食をとり、僕はそのあとすぐに風呂に入り、すぐ寝てしまった。なぜか、空を見る気にはなれなかったからだ。

[12月27日(月)]

またもや昼過ぎに起きてしまった。早寝早起きを心掛けなさい、と母に叱られた。一月末からは試験があるのだから、遊んでばかりはいられない。僕は勉強を始めた。まずは総合科目からやろうと思い、現代教育論、法と社会の復習を終え、宇宙科学IIにうつった。ミランコビッチサイクル、三体問題、様々なことを学んだものだが、なぜかオールト雲についてのページが不気味に目につく。近頃の流れ星騒ぎはオールト雲に関係があるのだろうか。いろいろ考えているうちに夕食の時間となった。

夕食後、テレビをつけてみる。やはり流れ星の話題で持ち切りだ。天文学の権威（とはいっても彼らは緊急会議に出席していないようだが。）といわれる先生方が熱弁をふるっている。具体的な理屈はよく理解できなかったが、とにかく、現在地球のあらゆる所で見られている流れ星は、あれは実は彗星の一種であって、相当数の彗星が地球に飛来しているのだという。そんなに多くの彗星が接近しているならいつかは地球に衝突するのでは、という恐ろしい考えが一瞬頭をよぎったので、その晩は不安のあまり寝付けなかった。

夜中の三時くらいになっても寝付けなかったので、僕は寝るのをあきらめた。なぜか、流れ星がいったいどれほど多いのか、この目で確かめたくなった。窓から空を見上げ、流れ星の数をかぞえ続けた。なんと、朝六時までに二百個ほどあった。数え落し等も考慮にいれば、実際はそれよりもかなり多いだろう。だが、いずれにしろ、これは異常な事態だ。寝るのはあきらめていたつもりが流れ星をかぞえ疲れてしまったのか、朝方に眠り込んでしまった。

[12月28日(火)]

目は覚めたはずなのだが、あたりは暗かった。すかさず時計を見てみると、午後六時であった。どおりで暗いわけだ。それにしても、いつもうるさく僕を起しに来る母は一体何をしているのだろうか。リビングへ行ってみた。母はテレビにくぎ付けになっていた。僕も、母と一緒にテレビにくぎ付けになってしまった。

天文学者たちの緊急会議は二日間におよび、その結論がでたのである。それによると、近頃の異常な数の流れ星は、間違いなく彗星であり、何らかの原因でオールト雲から次々と飛び出しているのだという。また、すでに火星が、彗星群の直撃をうけ消滅しており、地球にも遅からず彗星が降り注いでくることになる、とも言っていた。それに関連して、アメリカ国防省も会見をひらいていた。例の怪文書は、言語学者の解読の結果、地球外生命体から送られてきたものであること、その文書には、「地球」と「彗星」と「人が死ぬ」意味を表

すと考えられる象形文字に似た文字が書かれていたことなどから、地球外生命体からの警告文であると判断し、戦略級のミサイルを用いて、地上に降ってくる彗星を破壊する用意があることを述べた。

それを聞いて、僕は呆然としてしまった。しばらくの後、最初にとった行動はといえば、明日、友人と共に麻雀をするべく、友人に連絡したことであった。この非常事態にもかかわらず、僕はなぜか麻雀をしなくては後悔するような気持ちにとらわれたのだ。友人達は了解してくれた。きっと彼らも同じ気分なのだろう。その日は、夕食もろくに喉を通らず、すぐに寝てしまった。

[12月29日(水)]

朝十時、前回と同じメンバーが集まった。みんな心なしか顔色が良くない。だが麻雀は普通どおり始められた。前回、絶好調だったKの勢いには翳りが見え始めていた。その分とってはなんだが、僕は絶好調だった。一つだけ前回と同じなのは、ピンズに縁があるということだ。手なりに進めていくと、必ずといって良いほどピンズを待つ形になる。しかも、そのピンズをKが振り込んでくれるのだ。僕はダントツだった。さらに麻雀は続く。

ある時、僕は、清一色を張った。もちろん、ピンズのである。様々に考えをめぐらせ、リーチをかけることにした。次巡、僕がつかんだのは、当り牌のイーピン。そのイーピンを卓に勢い良くたたきつけたその時、あたりに轟音が鳴りひびいた。何事かと思いつきあえずテレビをつけてみると、ニュース速報で、アメリカが、日本の大気圏上空で彗星をミサイルによって破壊した、とあった。ついに、地球に彗星が降り注ぎはじめたのだ。その日は、五時解散にはならなかった。僕も、他の三人も黙々と麻雀を打ち続けた。そのまま、深夜をまわってしまった。

[12月30日(木)] 麻雀は続いている。相変わらず、ピンズにつきまといわれる僕。今度は、ピンズばかりの四暗刻を張る。しかも単騎待ち。当然、リーチはかけない。だが、すかさずKが振り込んでしまう。その時、ニュース速報が入る。アメリカ国防省本部が彗星の直撃を受け壊滅、ミサイル迎撃の指揮系統が大混乱し、世界各地に彗星が降り注いでいるとのことだった。これですべてが終りだ。四人全員の手がとまる。次の瞬間、今までに感じたことのないような、とてつもなく大きな揺れを感じた。瞬く間に家は倒壊し、僕は意識を失った。

しばらくして、意識が戻った。僕は生きていたのだ。あたりを見回してみる。僕の家は周囲は一面見渡せる荒野と化していた。友の生死は、すべては確認できなかったがあわれ、Kは家の下敷きとなり帰らぬ人となっていた。俺は生き延びたんだ!と思ったのもつかの間だった。遠方より透明の液体が押し寄せてきた。海水だ、と直感的にわかった。さっき落ちた彗星はおそらく海に落ちた

のだろう。迫り来る海水の前で、僕はいろいろな事を考えた。そのまま世界が崩壊することは間違いない。しかし、なぜ突然彗星が多量に地球圏に飛来したのか。「ミレニアム記念！オールド雲からの少し早めのお年玉」とか「オールド雲の久しぶりの大掃除」とか、頭に浮かぶのは馬鹿げたことばかりだった。眼前に迫る天まで届かんばかりの海水にあらがうこともできず、僕はのみこまれ、いしきがうすれていった。

目が覚めた。僕はすかさず、PHSで日付を確認する。十二月二十四日、午後六時四十七分であった。僕は東武電車に乗って帰路についている。僕は、夢の中で、世界を一週間のうちに壊してしまっていたのだ。

月曜日 — 朝は6時に起床。和風の朝食を済ませてから、マンションをでる。最寄り駅のK駅まで5分。T線で終点のS駅まで行き、I線に乗り換える。いつもと変わらず、大学へ到着。講義を受けて、昼食はいつものミニ中華丼。いつもと変わらない味。午後の講義は眠いが、なんとか終えて帰宅。宿題などして、寝るのは12時。

火曜日 — 朝、6時過ぎに起床。朝食は、いつもより心持、多くなっているような気がする。K駅に着くと、各駅停車の代わりに急行が来たので、それに乗る。大学では、午前中の講義を終えて昼食。ミニ中華丼を買ったが、量が少し少ない。午後の講義を受けてから帰宅。普段は1時間ほどかかるのに、今日は、45分ほどでついた。宿題などして、寝たのは12時15分頃。

水曜日 — 目が覚めると7時半。かなりの寝坊。朝食が、なぜか洋風になっている。すでに学校に行っているはずの妹と、洗面所の奪いあいをして、マンションをでるのが遅れる。電車もうまく来なくて、遅刻。昼食のミニ中華丼は売り切れていたの、ミニ牛丼を買う。ついていない。午後はいつもは眠いの、今日は、あまり眠くならない。帰ろうとして、大学の最寄り駅のKT駅に着くと、I線の快速なるものができていた。便利、便利。寝たのは、12時前。

木曜日 — 目が覚めたのは5時。早すぎるが、眠れなくなったので、朝食。昨日は、あんなに遅かった妹が、今日はすでに学校へ行ったとのこと。朝食は、バイキング形式になっている。K駅に着くと、T線が不通になっていたの、別の経路で学校へ。講義を受け、昼食。ミニ中華丼はあったが、量がかなり多い。午後の講義はすべてカットになる。帰宅しようとするが、電車が止まっていたので、タクシーで帰る。家に帰ると、だれもいない。夜になってもだれも帰ってこなかったの、早めに寝る。

金曜日 — 起きたのは6時。フルコースの朝食を、父親がつくってくれる。知らないうちに、兄がいることになっていた。定期が使えなくなったので、切符を買ったが1万円もした。大学につくと、講義が、8限まであることになっていた。昼食は、まともなものを売っていなかったの、お菓子で済ます。夜の11時頃に講義が終わる。家までなぜか乗り換えなしで帰れるようになっている。が、マンションが一軒家になっていた。疲れていたの、すぐにベッドに潜り込む。

土曜日 — 朝起きるとだれもいなかった。時計が日時計になっていたが、曇っているの、何時かは分からない。朝食を抜いて家を出る。今日は大学はないはずだが、行かなくてはならない気がする。新幹線で通学。大学では、みたこ

ともない講義が開かれていたたので、その1つに潜る。昼もお腹が空いていないので抜いてしまう。午後は、講義が分からないので早めに切り上げる。家が、大学の目の前にある。自分そっくりの人間が、出迎えてくれた。夜になっても眠くならない。

日曜日 — 気が付くとベッドの中だった。家も自分の家だか、他人の家だか分からない。大学まで歩いて2時間もかかる。講義に出てみるが、みたことも聞いたこともない言葉でやっている。分からないので抜ける。昼は、生えていた草を食べてみる。午後になると、人がいっぱいいて、バーゲン会場のよう。自分のいる場所がよく分からない。家への帰り方もよく分からない。だれがだれだかも分からない。

メイドロボは世界の終わりの夢を見るか？ ver1.01

* この作品は、『二次創作物』のつもりで書かれています。

* 引用出版物の著者名の敬称は略させていただきます。

○ プロローグ

—2000年7月16日—

世界の終わりが迫っていた。すでに、『この世』はひどく少ない地域となってしまうている。日本、オーストラリアを始めとする西太平洋地域、それだけが人類に残された縄張りだった。ひょっとして奇跡が起こってこの事態が終わっているのでは、と言う期待は願望に過ぎなかった。『起こらないから奇跡と言う』のだから。

畜生、この世界は何でこうなってしまったんだ？生き残ることが出来たら、ぜひ調べてみたいもんだ。

もちろん、彼はそれがかなり無茶苦茶な注文であることを承知していた。

設定状況 — 「歴史の分岐点」は些細なことで決まる—
 (『人間はなぜ戦争をするのか』日下 公人 著 より引用—)

1962年10月 ワシントン・ホワイトハウス

ホワイトハウス内は重々しい空気に包まれていた。無理も無い。今、まさに第三次世界大戦を引き起こしかねない決断が下されようとしているのだから。

「命令する」

合衆国大統領が口を開いた。

「合衆国四軍（陸軍、海軍、空軍、海兵隊）は『マングース作戦』を実施せよ」

『マングース』—合衆国軍のキューバ侵攻作戦はこの瞬間、発動が決定された。失敗すればどうなるか—そのことをこの国家安全保障会議のどのメンバーよりもよく『知って』いるだけに、大統領は緊張していた。一応、直接命令でミサイル基地攻撃部隊を増強しておいたが大丈夫だろうか？彼の不安は尽きなかった。

同日 モスクワ・クレムリン

世界の反対側とは打って変わってこちらは楽観的ムードだった。もっとも、本当に気楽にしているのは書記長だけだったが。彼には、自分達が勝つという『確信』があった。—大丈夫、念には念を入れて全てのミサイルはワシントンに向けた。これで多少狂っても大丈夫のはず—彼は、合衆国軍のキューバ侵攻作戦準備開始を聞いてから、絶対の自信で満ち溢れていた。

○キューバ危機

それは、旧ソビエト連邦（現在のロシア共和国）が旧キューバ共和国に反応弾道弾基地を建設しようとしたことから始まりました。これを重大な危機と捉えた合衆国はキューバに侵攻・これに対し、即座に破壊を（まだ）免れていたミサイル群に対し、反撃命令が下されました。

しかし、発射されたミサイルは、あらぬ方向へ飛んでいったり、自爆したりして、結局、一発しか合衆国本土には届きませんでした（しかも、それもほとんど無人の山奥に着弾したため、事実上、被害はゼロでした）。

これに対し、合衆国は反応兵器で報復し、24時間後には、キューバという国は文字通り蒸発してしまいました。あまりにも反応がすばやかだったため、結局、ソ連は西ベルリンを再び封鎖する以外の反応がとれず、第三次世界大戦は危ういところで回避されました。

○新しい世界

この反応（結果的にソ連がキューバを見捨てたこと）を受けて、北ベトナムは南への侵攻を中止し、アジアにも一応の平和が訪れました。

しかし、ソ連はこれでは収まりません。プライドを著しく傷つけられたソ連では、今までの穏健派の書記長に変わってタカ派の書記長が就任しました。しかし、書記長就任後からまるで別人のようにタカ派的言動が消え、かわってキューバで馬脚を現してしまったロケット・宇宙開発関連事業に力を注ぐようになります。その結果、1968年に合衆国より一年早くソ連は月に人類を送り込みました。

慌てたのは合衆国です。せっかく追い抜いたと思ったロケット技術でまた逆転された（と市民は思った）のですから。ここに、第二次宇宙開発競争が始まりました。

ところで、我々日本はどうしたのでしょうか？政府は大きく遅れを取ってしまった宇宙開発技術は合衆国に任せ、日本は50年後には一大産業になると想像された情報科学立国を目指すことにしたのです。その結果、重化学工業化のための資金がかなり転用され所得倍増計画は目標を達成できず、一時的に成長率は鈍化しましたが、今日の日本の成功（1997年に試験が始まった情操機能搭載型汎用人型家事ロボットは皆さんご存知でしょう）を見る限り、国家百年の大計として賞讃されるべきでしょう。

たとえ、もしその資金を宇宙に投資していたら、合衆国を追い抜けた可能性があったとしても（1987年に完成した合衆国初の軌道基地の、計画のチーフが日本人というのは有名なことですね）。

——1999年度用国定社会科教科書より抜粋——

2000年7月10日 東京

「ご主人様～、朝ですよ～」

俺は自分のメイドロボの声で起こされた。かつて、俺が運用試験に関わった HMX-12 (人型メイドロボット試作 12型) ——市販されている HM-12 のプロトタイプ——だ。本来ならば、試験運用後、廃棄処分となるはずだったが、ひよんな事より、俺のところに送られてきたのだ。

「あっ、今日は一度で起きましたね～。これなら今日は走らずにすみそうですね～」

俺の寝起きは異常に悪く、まず間違い無く幼馴染が窓の外で連呼することによってやっと起きてきていた ——別に声が大きいからではなく、この年で「ちゃん」づけで呼ばれるのが恥ずかしいからである——。もちろんそのころには遅刻ぎりぎりだ。「それより飯は？」

「ううっ、すみません～」

またか…。彼女(言い忘れたが、女性型である。外見年齢は、メーカーによれば、一応、16才程度となっているが…) がまともに朝食を作れたためしは、家にやって2ヶ月、一度も無い。おかげで俺はこの間、数回しかまともな朝食をとっていない ——もちろん、俺ではなく、それを見かねた幼馴染が作ったのである——。ようするに、前と変わってないだけだから、別に気にしていない。

「明日こそがんばります～」

もちろん、彼女は毎日こう言っている。普段どおりカップ麺で食事を済ませ、登校の準備を始めた。

今日も普段と同じ一日になる。そう思っていた。

同日 合衆国・ケープケネディ

「ヨーク 11号、応答せよ! 応答せよ!」

全係員が、必死に地球からちょうど 40万キロ地点で音信不通になったヨーク 11号——合衆国が 2000年の建国記念日にあわせて打ち上げた人類初の月軌道外への有人ロケット——を呼び出そうと試みていた。光学観測によれば、正常に飛行しているはずだが、乗組員からの連絡が突如途絶えたのだった。

しかし 1分後、彼等はそれ以上に衝撃を受けることになる。火星にたどり着いたはずのヨーク 9号 ——中の HM-8 が連絡をとり続けていた—— が消滅したと言うのだ。音信不通ではなく消滅? 何かの間違いだろうと思ったが、光学観

測の結果、疑いよりの無い事実と判明。しかも、静止軌道より外側の全ての人工天体 — もちろんヨーク 11号も含まれる — が次々と「消滅」していくさまを見て、完全にパニックに陥ってしまった。

しかし、それすらも、その直後に起こった現象に比べれば、前座に過ぎなかった。

同時刻 太平洋上・日付変更線

日付変更線—人類が便宜的に作った便宜的な線上でいっせいに光が立ち上った。高度3万6000キロにまで達する光のカーテンは、やがてゆっくりと東へ動き始めた。

2000年7月11日 東京

「ご主人様～、朝ですよ～」

昨日と同じく起こされた。今日も起きれた。しかし、気分は優れない。当たり前だ。世界が終わりかけているのだから。

昨日の帰路、車中で、世界が終わるのだのどうこう言っているサラリーマンを見かけたときは、正直言って、集団妄想でも流行っているのか— そう思った。

しかし、帰ってつけたTVの画像は彼に衝撃を与えた。全ての局が世界の終わりを伝えていたのだ。— 静止衛星からとらえた映像では、わけのわからない「光の壁」の通り過ぎた後は完全に何も無くなっていた。西側— 「壁」の進行方向と逆側から入ったものも、日付変更線を過ぎた瞬間に消滅した。しかし、奇妙なことに、そちらに向かって空気や海水がなだれ込むということは無かった。それどころか、ラインの内側からも外に流れてきているようであった（もっとも、空気と海水だけだが。入り込んだ調査員は二度と戻ってこなかった）。ほぼ一日50度の割合でこの「壁」は東へ進みつづけている。

そのときは、世界が終わると言っても、全く実感はわかかなかった。信じられなかった。しかし、一夜明けてみると、だんだんと恐ろしさが身に染みてきた。しかしどうすればいいと言うのか？考えた挙句、俺は普段どおりに行動することにした。登校することにしたのだ。ドアを開けると、同じ結論に達したのであろう、黄色いリボンをつけた幼馴染がやってくる姿が目に入った。

2000年7月12日 ワシントン

「政府は何をやっているんだ！」

「私は死にたくない！」

「助かる方法を教えろ！」

ホワイトハウス前ではデモ隊がシュプレヒコールを上げていた。経度の関係上、早期に消滅しかかっている合衆国。ハワイは異変初日に姿を消し、3日目

の今日では、「壁」はついに東部の州に差し掛かりつつあった。「お前等だけ助かる気か！」

一部のキリスト教徒は、「審判の日が訪れた」と、この現象を受け入れたが、大方の人々はまず脱出を試み — とりあえず東の欧州やアジアへ向かおうとしたが、航空機の絶対数からいって足りるわけが無い。第一、一度東側へ飛んだ機は戻ってくるわけが無かったし、ダイヤもめちゃくちゃ、というより、事実上もはや存在していなかった — 、それが不可能とわかると、全土で暴動が発生した。ここワシントン D.C で暴徒がホワイトハウスに突入していない理由は簡単なことで、異変の全貌をいち早く知った副大統領が連邦軍で警備させているからに過ぎない。

「大統領！隠れてないで出て来い！」

大統領は、異変が始まった瞬間、文字通りの意味で「姿が消えた」。衆人の前でだ。そのことを TV 局が報道すると、「大統領は一人助かる方法を知っている！政府首脳だけ助かる気だ！」と歪曲された形であつという間に伝わったのだ。

「このまま黙っていたって死ぬだけだ！」

「壁」がワシントンに来るまであと 2、3 時間といったところだった。

「いちかばちか突っ込むぞ！」

その掛け声とともに暴徒と化したデモ隊がホワイトハウスに侵入を試み、当然連邦軍がこれに発砲。暴徒側も応戦 — と言ってもささやかなものだが — 、ホワイトハウス前は阿鼻叫喚の地獄と化した。

2000年7月13日 東京

「ご主人様～、朝ですよ～」

また朝がやってきた。気が滅入るだけだから見てもしょうがないと分かっているのだが、それでも TV をつけてしまう。

状況は何一つ変わっていなかった。数時間前、合衆国は消滅した。「壁」は今も大西洋上を東へと進んでいる。EC 諸国は軒並み戒厳令を敷いている。フィジー諸島は今年の正月を上回る人が押し寄せ、なお増加中（そこに行ったって、せいぜい数日しか長生きできないと言うのにご苦労なこった、と思った）。

日本国内では、まだたいした混乱は起きていなかった。政府は非常事態宣言を発令、予備自衛官の召集を行い（そういえば何で総理が発表しなかったんだろう）、物価統制令を出したが、こちらはさしたる効果が無かった（もともと、金銭の価値なんか無いに等しいと思うのだが）。しかし、まあ一週間の食べ物程度はあるからどうってことはないが。犯罪は「思った程」は増えていない。まあ、発砲許可の出た自衛隊員や機動隊が大都市に展開しているせいもある

が、「何をしてもいまさら無駄」とあきらめモードに入った影響のほうが大きいようだった。

信じがたいことに、未だに社会システムは辛うじて動いていた。やはり、まだ日本が直接消滅し始めてはいないからだろう。電気、ガス、水道は今までどおり供給された。電話はさすがにつながりにくい。回線がパンクしているせいだ。

商店は、まだ細々と営業している。とはいっても、すでに大半の店は売るべき品など残っていなかったが。銀行は、11日の午前中までに全て営業が不可能になっていた（もちろん、とりつけ騒ぎのせいだ）。

交通網では、自動車が長距離移動には意味をなさなくなった。高速道路は車で埋まっている。特に東行きが混んでいるというわけではないから、おそらく、最後の時を故郷で迎えたいという人達だろう。国内線の飛行機は運行を停止した。全ての飛行場が西からの航空機の受け入れでてんでこ舞いだからだ。鉄道は、大量の職場放棄が相次いだため、間引きダイヤだが、まだ動いていた。もっとも、おとといはまだ10分おきに來ていた山手線が、今日は20分おきだというのだから、他の線も押して知るべしである。新幹線は、まだ本数はそれなりに出ているのだが、どれもこれも朝の通勤ラッシュもかくやといった殺人的混雑だった（そういえば、ウチのクラスのシケ長は、たしか神戸出身だったけど、無事帰れただろうか？）。

「やっぱまた寝るわ」

大学は昨日から休校になっている。とくにすることもないので、俺はまた寝ることにした。

2000年7月14日 モスクワ

モスクワでも、2日前ワシントンD.Cと同じ騒ぎが起こっていた。もっとも、この国の大統領がTVに出たがらないのは今に始まったことではない。たとえ合衆国大統領と同じように「消えた」ということが分かっても、『『アル中で死んだ』の間違いだろう？』と思われるのが落ちではあったが。政府による事態究明と対策を求めるデモは果てしなく続いた。

2000年7月15日 東京

「ご主人様～、朝です…はわわっ!!」

俺は悪夢で飛び起きた。もっとも、起きたこの世界も悪夢そのものだが。そういえば、昔、中国だかどこだかの詩人が詠っていたな。「蝶になって空を飛ぶ夢を見、目が覚めた。しかし、ひょっとして自分は蝶で、今、人間となっている夢を見ているのではないだろうか。」まあ、この場合、どちらの現実もお断りだが。

「なあ、そういえばちょっと聞きたいことがあるんだが」

「はい、なんでしょう？」

「お前も夢を見るんだよなあ？」

「はい、見ます」

彼女はなぜかロボットなのに夢を見るのだった。情操機能のせいだろうか？

「やっぱ、悪夢とかも見るのか？」

「ええと…、基本的に経験したことを再構成しているわけですから、ええと、やな事を経験していれば見るかも…しれないと思うのですが…すみません、よくわかりません…」

「いや、別にたいした事じゃないんだ、答えてくれてありがとう」

すっかり落ち込んでしまった彼女を見て、俺は頭をなでてやった。彼女はこうされるのが大好きだ。

「あ……。あ、ありがとうございますっ！」

そういえば、コイツは、一度「世界の終わり」を経験したんだよな。試験終了後、電源を切られた —— つまり「死」と同義だ —— わけだから。そのとき、どんなことを思ったんだろう？一週間後に電源を切ると知らされながらも普段どおりに振舞う — そのコツでも教えてもらおうと思ったが、止めにした。かつての別れの時 —— その時はお互い永久の別れと思った —— の悲しげな表情を思い出すと、残酷で聞けなかった。今度の別れ(?)こそ、本当に永久の別れだろうが。

俺に残された時間は、あと 24 時間といったところだろうか。恐るべき職業意識でまだ任務を果たしている治安関係の人々、オートメーション化されているおかげで人手ナシで動きつづける電機・ガス・水道、職業意識の塊の引退間際世代と趣味感覚の若手でまだ一部が（本当に）辛うじて動きつづけている鉄道（実は、「電車で GO！」マニアが動かしている、と言う恐るべきうわさもある）…本当に信じがたいことに、まだ社会システムは生きていた。暇だし、あの 3 人でも誘ってゲーセンでも行くか（12 日から、開き直った店主が、無料で 24 時間解放していた）…。

そんなことを思っていると、突然、家の前で甲高いクラクションの音がした。

「やっほー。ひさしぶりね。なに？まだ寝てたの？」

「こいつはいつもそうなのよ～。はやくしないとおいてくわよ～」

「あっ、おひさしぶりです～。お元気でしたか～？」

二人の女性が車から姿を現した。一人はこのロボットを作った財閥のお嬢様だ。その姉が同じ高校に通っていたせいもあって、それなりに面識もあった。もう一人は…見なくても分かる。こんな言い方をする女は、俺の幼馴染 NO.3 しかいない。

「いったいなんだ？こんな朝っばらから？」

「なによ～、せっかくこのあたし自らが同窓会に誘ってあげようって言うのに～」

同窓会？

「姉さんがどうしても開きたいんですって。それであなたにもお声がかかったのよ。どうするの？来る？来ない？あっ、勿論その娘もね」

「はわわわっ、私なんかが行ってもいいんでしょうか～」

他にすることがあるわけでもない。もちろん俺は快諾した。

俺の乗った車は、なぜか福生に向かった。

「なんでこんなところに？屋敷でやるんじゃないのか？」

「ちょっと出迎える人がいるもんでね…あー、来た来た」

北と西から各一機の小型機が現れた。中から現れたのは…

「あっ、委員長！」

俺は、シケ長を思わず高校時代の役職で呼んでいた。

もう一機から降り立ったのは…、高校時代、少し学校を騒がせた、一学年下の超能力少女だった。

「…おひさしぶりです」

そういえば、彼女は函館出身だった。

「後のメンバーは先に行ってるから、これで全員そろったわね」

「ちょっとまで。俺はどこに乗るんだ？」

どう考えても定員オーバーになる。

「あっ、悪いけど彼女の運転するそっちの車で来てね」

そう言って、HM-13 —HM-12の後継機— と、どう見ても乗りごごちの悪そうな一台の車を指した。

「ほーほっほ。まあ、レディーファーストって事で。悪いわね～」

「ほな、先行こうか」

「…お先に失礼します」

…みんな薄情だった。突っ立っていてもしょうがないので、俺も屋敷に向かうことにした。途中、暇なので、俺はHM-13に最近の世の中の動きを柄にもなく聞いてみた。昨日から、TVはまともにニュースを流すのを止めて、バラエティーなどばかり流していた。勿論、俳優が集まるわけがないから再放送だが。ラジオも似たような状況で、音楽、それもやけに明るいばかりノンストップで流しつづけている。もはや取材するスタッフがいないせいもあるが、もう、誰もが暗いニュースにうんざりしていたせいもあるだろう。このHM-13は、衛星とリンクして本社の情報データベースから情報を取り出せる。色々聞いてみようと思った。

しかし五分後、聞いたことを後悔した。情勢は悪いなんてレベルではなかった。イスラエルでは、最後を聖地で迎えようとしたイスラム教徒とユダヤ教徒が衝突、たちまち拡大してあっという間に大規模武力衝突になった。インドーパキスタン国境では、両国の軍部過激派が暴走、なんと反応兵器戦争にまで発展していた。パキスタンは壊滅、インドも少なからぬ被害を受けたそうだ。もっとも、この二つの紛争地帯は、数時間後には「壁」に飲み込まれ、すでに地球上から消え去っているが。

日本国内はそれに比べるとましーーと思っていたが、そうでもないようだ。東京圏や大阪圏、あと郡部は比較的静穏だが、地方ではいくつかの都市で暴動が発生、治安が崩壊しているそうだ（おかげで、ついに新幹線も不通になったので、委員長が飛行機で来たと言うわけだ）。もはや、東京や大阪と言った大都市圏以外では、鉄道が運行できる状態ではないようだ（大都市圏でも30分に一本程度の間引き運転だが）。

高速道路は乗り捨てられた車であふれ、とても走れない。航空機は運行を停止したまま（だから、羽田ではなく、軍用ということでまだ飛行場機能を残している福生に来た）。いよいよ、もはや国内移動もできなくなってきたと言うわけだ。

「壁」はそろそろビルマにかかろうとしていた。

2000年7月16日 世界

「壁」はついに極東に到達。シンガポール、マレーシア、朝鮮などを飲み込み、とうとう日本を吸収し始めた。この時点で残っている国は、もはや日本とオーストラリア、ニュージーランドぐらいだった。

同日 am.09:25 東京

俺は唐突に目が覚めた。昨日、HM-13に計算してもらった「壁」の到達予想時刻は午前9時38分だから……もうあとわずかか。他のみんなは3時間前までの飲めや歌えやの馬鹿騒ぎに疲れて一というより、酔いつぶれて眠っている。俺は、いまさら眠れるとは思わなかったし、だからといって眠っている奴等を起こすのもためらわれた。あと13分だというのに、わざわざ起こして怖がらせるのもなんだ。それにしても…眠っているメンツを見て思った。どういう基準で選んだんだろう？先輩（昨日迎えに来たお嬢様の姉。もちろん面識はあるが…）と同じ学年の人は一人もいない。まあ、友達の少ない人だったから、それはよしとしよう。俺の三人の幼馴染もいい。1学年下の格闘少女は（妹のほうのつながりで）わかる。残りは……、ウチのクラスの委員長、隣のクラスの貧乏人、合衆国から来ていた金髪娘に一つ下の超能力少女……ぜんぜん接点が見えない。いや、無いわけじゃないか……って、ちょっとまって、何で俺と

関わりがあったことを知っているんだ？ いったい、この財閥の諜報部の外套と短剣を操る長い手はどこまで伸びているんだ？

暇なので、部屋のデータベース端末にアクセスしてみた。

ふと廊下を見ると、一瞬、誰かと思ったが、幼馴染 NO.1 の姿が見えた。髪形を変えて――というより、昔のおさげに戻っていたせいだ。おかげで、一瞬、コイツの母親かと思ったくそういえば、いったい、あの人は何才なのだろう？ 〉。

「――ちゃん」

ふいに話しかけてきた。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

こんな時でも――いや、こんなときだからこそ、お互いに平静を装った。

「いい天気だね」

「昨日もだけどな」

「明日も…晴れる…と……いい…ね……」

最後は涙声だった。

「なんで!? なんでこんなことになったの!？」

それは俺のほうがか聞きたいぐらいだった。いったいなぜなんだ？ ほんの一週間前まで確固たる世界だったものが、あと十分足らずで終わろうとしている。東へ行けばもう少し長生きできるが、それだけだ。どっちにしろ、この世は後数時間で終わるんだ。

俺は、昔読んだ SF 小説を思い出した。確か、あれでは、一人の超能力者の妄想で人が次々消えていったんだよな。ひょっとしてこれも……って、馬鹿馬鹿しい。そんなワケあるか（もちろん彼は、身近に「超能力者」がいることを忘れていた。覚えていたとしても、彼女が原因だとは思えないだろうが）。それとも、どこぞの誰かが人類補完計画でも発動させたのか？ いけない、俺まで現実逃避してどうする。

俺は、コイツを抱きしめた。それしか出来ることは無かった。「――ちゃん……」

西の空が明るくなってきた。「壁」が遂にやってきたのだ。あと何秒だろう？ とにかく、消えるまで、ずっとこうしていよう、俺はそう思った。

彼が何かを考えたのは、それが最後だった。

ゲームマスター

――もう一度ひっくり返してみるか――

阿合 捷一郎

(『氷山空母を撃沈せよ!』3巻 伊吹 秀明 著 より引用――)

「どうだったかね、このゲームの出来は？」

開発主任は3人のプレイヤーに尋ねた。彼等は新作ソフト「20世紀」 — 1951年から各国の元首となり、どの国が2000年までに20世紀に最も名を残せるか — のテストプレイヤー達だった。プレイヤー以外の人間には、全て（浮浪者まで！）人工知能を組み込んで超高速で思考させてコミュニケーション可能、という化け物ゲームだった。CPUにHM-20 — 2016年から発売されたメイドロボシリーズの最新型で、わずか9ヶ月で高い値段というハンデを乗り越え普及率20パーセントに達した — を利用することで実現した。要するに、HMX-20に直接つないで、パソコンとは比較にならないそのCPUを使うわけだ。

「どうもこうも…バグってるじゃないですか！」

それでゲームは全てのデータがデリートされ、強制終了してしまったのだ。

「すまんすまん。まさか20世紀中に月軌道の外に行けるとは思わなくてな。」人間の行動用フィールドは地球から半径40万キロ分しか用意されていなかった。

「ところで…日本担当のキミ、まさかあの計画は…」

「はい、もちろんここが22年前出した、アレです」

「アレ」は、5年前に15年ぶりにTV上で放映され、新たな支持層を獲得していた。

「まあ、それはいいんだが…あの世界をよく作れたもんだ。それはともかく…あの判断は見事だ。宇宙開発で張り合っても、あの設定では無駄だからな。史実からいったら、なかなか決断できないだろうが…。それより…二人とも、キューバのアレを回避する気は無かったのかね？」

「それは考えましたが…下手に退いたら失脚で大幅減点くりますし。まあ史実どおりなら…と思ったんですけど…結局だめでした」

「合衆国担当は？」

「まあ、史実どおりなら、事実上のゲームオーバーになるのは分かってましたけど…」

「まったく…まあゲームだからいいが…第三次大戦もこんな風にして起きたんだろうな」

主任は壁の世界地図を眺めた。もちろん現実のものだ。その証拠に、欧州と北米にはまともな都市はほとんど無い。1962年以来ほぼ無人地帯と化している。

「まあ、開戦と同時にワシントンがやられなけりゃ、ソ連と共倒れぐらいは出来たはずだが…それなら反応弾の冬で日本も滅んでいたかもな。それにしても

全弾不発とはすごい確率だな。まあ、その「すごい確率」のおかげで日本が今あるわけだが…」

主任は再び地図を眺めた。大都市は、WW後発展した東南アジア・南米をのぞけば、日本と旧ソ連しかない。前者は弾道弾搭載潜水艦が事故で沈んだため、後者は統制の取れない米軍の反撃が軍事施設に集中したため（もちろん秘密反応兵器都市のたぐいは全滅している）。まあ、旧ソ連の都市は、特に1991年のソ連崩壊後は更に困窮しているが。

「個人的には、アレを平和裏にかたづけて欲しかったんだが…。今度はお互い交渉で片付けてみてくれんか？例えば、とりあえず、封鎖で止めにして…キューバの弾道弾撤去と引き換えに…そうだな、旧式化したトルコの奴を撤去してお互いのメンツを保つとか。それなら前みたいな予算を組めないだろうから、とりあえずバグは関係無いだろう。ちょっとやってみてくれんか？その間に修正版を作っとくから」

木曜日

今日はバイト先の忘年会。ひさしぶりの飲み会で俺は飲みまくった。

金曜日

朝に弱い俺は昼過ぎに目がさめた。昨日飲み過ぎて裸で寝てしまったから風邪をひいたらしく体がだるい。まあバイトは昨日で終わったから、今日はゆっくり休もう。カップラーメンにお湯を入れてテレビをつけた。どこもニュースばかりで面白そうな番組はやっていない。俺はテレビを消してラーメンを食った後、薬を飲んで寝る事にした。

土曜日

朝に弱い俺はまたも昼過ぎに起きた。風邪は昨日よりひどくなっているらしい。何をしても体が重く感じる。しかし熱はないらしい。病院にいった薬をもらって来ようと思ったが今日は土曜だった。俺は今週とりためたビデオを見て一日中過ごした。

日曜日

やはり体が重い。しかし今日も病院はやっていない。気晴らしにテレビを見ようとしたがやはりニュースしかやっていない。立っているのも辛かったので俺は布団に横になりそのまま眠ってしまった。

月曜日

布団から体を起こすのもやっとのくらい体が重い。俺は体重計に乗ってみた。3日間まともに食っていないのにも関わらず、40キロも体重が増えていた。しかし鏡を見ても外見はそう変わらない。体重計が壊れているんだろう。俺はテレビをつけた。やはりニュースしかやっていない。ニュースの中で総理大臣かなんかが、なんかの定数が増えたとか減ったとか言っているが俺には政治の事はさっぱり分からない。体重が増える病気の話はなかった。そんな病気も聞いた事はなかった。頭がボーッとする。俺はテレビを消して横になった。俺の体はどうなっちゃったんだ？窓からは昇ったばかりの大きな月が見えた。

火曜日

もう体が持ち上がらない。俺は自分の友人で、筋肉にウイルスが感染したやつを思い出した。きっと俺もそれに違いない。俺の筋肉は弱っていているんだ。俺は転がって受話器を手にとり救急車を呼ぼうとした。しかし誰も電話に出なかった。俺はこの先どうなるのだろう。

夜中に目がさめた。昼間よりも少し体が軽くなった。俺は体を起こす事ができ